目　次

序章　〈アルヨことば〉にまつわる疑問……1
ある台詞　2　役割語と〈アルヨことば〉　4　「協和語」と〈アルヨことば〉　6　本書の課題と構成　7
「支那」「満洲」の表記について　9

第一章　宮沢賢治は「支那人」を見たか……11
宮沢賢治「山男の四月」　12　「支那人」について　15
「支那人」の話し方　21　夢野久作「クチマネ」　25

第二章　横浜ことばとその時代……33
ピジンについて　34　リアルなピジンとしての横浜ことば　37　フィクションの中の横浜ことばと中国人

44　*Exercises in the Yokohama Dialect*　48
Nankinized-Nippon　51　明治中期〜昭和初期の創作的作品　56　語彙から見た横浜ことば　61　この章のまとめ　64

第三章　〈アルヨことば〉の完成 …… 65
横浜ことばから宮沢賢治へ　66　坪田譲治「善太の四季」68　雑誌『赤い鳥』と坪田譲治「支那手品」72　「日清戦争異聞（原田重吉の夢）」80　「チンライぶし」83　海野十三「人造人間エフ氏」85　のらくろ三部作の時代　87　のらくろ三部作の構造　90　豚のことば　93　この章のまとめ　99

第四章　満洲ピジンをめぐって …… 101
満洲義軍　102　満洲と日本人　106　「日支合弁語」「兵隊支那語」「沿線官話」そして「協和語」109　中谷鹿二『日支合辨語から正しき支那語へ』112　「有」

語法・「好」語法　117　『支那在留日本人小学生　綴方現地報告』119　軍事郵便に現れた満洲ピジン　129
戦中・戦後の日本人の記録やフィクションに現れた満洲ピジン　134　この章のまとめ　140

第五章　戦後の〈アルヨことば〉……143

戦後日本と中国人　144　「拳銃無頼帖　抜き射ちの竜」146　「喜劇　駅前飯店」148　手塚治虫　150　石ノ森章太郎「サイボーグ009」152　前谷惟光「ロボット三等兵」155　その他のマンガ〈一九八〇年代〉の中国人キャラクター　157　「ひょっこりひょうたん島」159　ゼンジー北京　162　中国イメージをめぐる国内・国外情勢の変化　164　チャイナ少女の登場――〈アルヨことば〉とジェンダー　165　高橋留美子「らんま1/2」167　二〇〇〇年代のチャイナ少女　169　美少年と〈アルヨことば〉173　〈アルヨことば〉に代わる中国風訛り　176　この章のまとめ　179

終章　「鬼子（グイズ）」たちのことば……181
「鶏毛信」182　〈鬼子ピジン〉の語彙と文法185　抗日映画・ドラマとステレオタイプ190　横浜ことば、〈アルヨことば〉、満洲ピジン、〈鬼子ピジン〉の関係192
さいごに――「進上」の旅198

引用テキスト……201
参考文献……207
あとがき……215
年　表
索　引

序章　〈アルヨことば〉にまつわる疑問

ある台詞

次に挙げる台詞を見られたい。

- 「あなた、この薬のむよろしい。毒ない。決して毒ない。のむよろしい。わたしさきのむ。心配ない。わたしビールのむ、お茶のむ。毒のまない。」
「さあ、のむよろしい。ながいきのくすりある。のむよろしい。」
- 「兄さん、シナ手品おもしろいか、シナ手品こわいあるか。」
- 「それ、あなた。すこし、乱暴あるネ。」
- 手品やるアル　皆来るヨロシ
うまくゆこなら　可愛(かわい)がっておくれ
娘なかなか　きれいきれいアルヨ
- 「こりアたまらん　あんな強い奴にあつちや　かなはんあるな」
「逃げるよろしいな」
- 「どっちがにせあるか　かけするよろしいな」

「よろしいある　負けた方ラーメンおごるか」
・「お前ら　いつまでたってもガキのまんまじゃねーあるか」「少しは大人になるよろし」
「菓子やるからこれでも食って落ち着けある」

これら台詞は一見して分かる通り、大変特徴的であり、読む人に強い印象を残す。その特徴は次のようなものである。

A　文末に「ある」がついて断定を表す(「ある」語法と呼ぶ)。
B　文末に「よろし(い)」がついて命令ないし勧誘を表す(「よろしい」語法と呼ぶ)。
C　「が」「を」等の助詞が抜け落ちている。
D　文と文をつなぐ接続詞や接続助詞等も抜け落ちて、文と文との関係がつかみにくい。

これらの台詞を話しているのは、どのような人物かと聞かれたら、多くの方は「中国人」と答えるのではないだろうか。しかし、身近に中国の人たちと接している方々は、今、彼らがこんな話し方をしていないことを同時によく知っているだろう。なぜ、この台詞を中国人が話していると私たちは感じるのだろうか。

これらの用例は、古くは一九二一(大正一〇)年から新しくは二〇〇八(平成二〇)年まで、さ

まざまなジャンルのフィクションから採られた、中国人あるいは中国人に類した人々の台詞である。それぞれどの時代のどこから採られた用例であるかは、本書の第一章以降をお読みいただきたい。本書ではこれらの話し方をまとめて〈アルヨことば〉と呼ぶことにする。〈アルヨことば〉は、仮想的に構成された一種のピジン（第二章参照）である。「ある」語法、「よろしい」語法を含み、外国人（多くは中国人）の片言風の話し方を表現する。

役割語と〈アルヨことば〉

本書では、〈アルヨことば〉を一種の「役割語」と見ている。役割語とは、特定の話し方（語彙、語法、言い回し、声質、抑揚等）と人物像（性別、年齢・世代、職業・階層、人種・国籍、場面等）とが連想関係として結びつけられ、かつ社会的にその知識が共有されている時の、その話し方のことを指す。例えば次の話し方を示されたとき、多くの日本語話者は、1を老人、2を裕福な家庭の女性、3を関西人と捉えることだろう。それぞれを、役割語としての〈老人語〉、〈お嬢様・奥様ことば〉、〈大阪弁・関西弁〉と捉える。

1　そうじゃ、わしが知っておるんじゃ。

2　そうよ、あたくしがぞんじておりますわ。

3　そや、わてが知ってまっせー。

役割語の詳細については、拙著『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』(二〇〇三)その他、巻末の参考文献を参照されたいが、役割語は現実の特定の集団の話し方を元にしている場合もあるし、まったくの想像で作られたものもある。例えば「ワレワレハ宇宙人ダ」と、抑揚のない機械的な音声で言えば〈宇宙人語〉であるが、宇宙人の話し方は現実には存在せず、フィクションの中で作られたものである。

本書の課題の一つは、〈アルヨことば〉が現実の話し方に基づいているのか否か、あるいは歴史的にどのようにして中国人等の外国人話者と結びつけられたのかということを明らかにすることである。〈アルヨことば〉、あるいは中国人の話す片言ないしピジンについて、一般にかなり高い関心が持たれていることを感じる。筆者自身、新聞・雑誌やテレビ番組の取材等で、「〜アルヨ」という言い方は本当にあったんですか」「いつごろどこで使われていたのですか」という質問をたびたび受ける。戦前の日中関係と結びつけようとする言説もしばしば目にする。

「協和語」と〈アルヨことば〉

〈アルヨことば〉、あるいはそれに類似する片言・ピジンについて語られるとき、「協和語」という用語がしばしば登場する。例えば、門間貴志「朝鮮人と中国人のステレオタイプはいかに形成されたか」の注1に、次のような記述が見られる。

> フランキー堺やゼンジー北京が話す中国風の日本語は、満洲国の建国初期に用いられた簡易的な日本語である協和語がルーツとされる。中国語の単語が混じり、用言の語尾変化と助詞の一部が省略されている。（一六二頁）

ほかにも、例えばインターネットで「協和語」というキーワードで検索をかけると、このような言説のバリエーションがいくつか見られる。第四章で触れるように、「協和語」については桜井隆氏の詳細な研究があるのだが、満洲で実際にどのような言語が話されていたのか、〈アルヨことば〉との関連はどのようなものであるか、また「協和語」という呼称を用いることが妥当かということを含めて本書で取り扱いたい。

本書の課題と構成

本書の出発点としての課題をまとめると、役割語としての〈アルヨことば〉のルーツと歴史的形成について探求し、また日清・日露戦争以降、日中戦争終結までの中国における言語実態を探り、それと〈アルヨことば〉との関連について考察すること、ということになろう。

本書の構成と主な内容は以下の通りである。

第一章　宮沢賢治は「支那人」を見たか

〈アルヨことば〉のもっとも古い例として、宮沢賢治「山男の四月」を取り上げ、類似した題材を扱う夢野久作の「クチマネ」と対比しながら、当時の世相とステレオタイプの形成について考察する。

第二章　横浜ことばとその時代

〈アルヨことば〉に先立って、開港場であった幕末〜明治の横浜で発生したピジン＝「横浜ことば」の実態やその影響を資料に基づいて検証する。その中で、*Exercises in the Yokohama Dialect* 改訂増補版に収められた Nankinized-Nippon（南京訛（なま）り日本語）が〈アルヨことば〉の原形であった可能性を指摘する。

第三章　〈アルヨことば〉の完成

「山男の四月」に引き続き、昭和初期〜日中戦争時代にかけて、日本国内で作られた〈アルヨことば〉の用例を、世相との関連から分析していく。

第四章　満洲ピジンをめぐって

日露戦争、南満洲鉄道設立、満洲事変から満洲国建国という歴史の流れのなかで、現地で使われたピジンの実態をいくつかの資料に基づいて検証し、〈アルヨことば〉との関連も探る。

第五章　戦後の〈アルヨことば〉

戦後にポピュラーカルチャー作品のなかで生き延びた〈アルヨことば〉と、そこに立ち現れる中国人イメージ、およびその変遷について述べていく。

終章　「鬼子（クイズ）」たちのことば

中華人民共和国で作成された抗日映画に登場する「日本鬼子（リーベンクイズ）」＝残忍で愚かな日本兵の話す独特のことば、〈鬼子ピジン〉に着目し、それが満洲ピジンと大変近い関係にあることを述べる。また、横浜ことばから〈鬼子ピジン〉に至るまで、数奇な運命をたどった「進上」ということばの歴史を探る。

「支那」「満洲」の表記について

本書では、その内容上、戦前・戦中の日中関係にまつわる語彙を本文中で用いるので、その用語についてあらかじめ述べておく。

戦前、中国のことは日本では一般的に「支那」と呼ばれていた（同様に、「支那人」「支那語」などとする）が、戦後は「中国」（「中国人」「中国語」）とするのが一般的である。本書でもこの慣習に従い、本文では「中国」を用い、引用や書名等に限って「支那」を用いることとする。

満洲については、「満洲」「満州」という二種類の表記が今日行われているが、戦前はもっぱら「満洲」であった。本書でも本文では「満洲」の方を用い、「満州」は引用および書名の表記のみに用いる。なお、満洲は本来、民族および地域の名前であり、また戦前にこの地域に建国された「満洲国（後に満洲帝国）」は、今日、帝国日本および関東軍によって建国された対日協力国家（いわゆる「傀儡（かいらい）国家」）であるとされる。それゆえ、中国側の研究者の間では「偽満洲国」あるいは「偽満」と呼び、また必ず括弧で括って示すことが慣習となっている。筆者も、満洲国が対日協力国家であったとする見方には疑問の余地がないと考えるが、本文では表記上の簡便さを重視して括弧なしで満洲国という呼称を用いることとする。

それでは、〈アルヨことば〉をめぐる歴史の旅を始めよう。ひとまず時代は一九二〇年代、場所は岩手県のにしね山（やま）から旅は始まる。